

## 1-1 情報スキル: 情報とコミュニケーション科学の概念的集中

ヘイソス ラウ 博士

ベラクルス大学 ベラクルス (メキシコ)

ディレクター、USBI VER図書館 主任研究官、工学研究所

jlau@uv.mx; www.jesuslau.com

ヘイソス コルテッス

デシウダーフアレス自治大学 (メキシコ)

大学院 博士課程

jcortes@uacj.mx

### 要約

今日、情報は個人の成長と幸福のための主要な資源の1つであるため、情報の分配と活用は、社会のために最優先されなければならない。だれもがこの情報源の活用方法を学ぶことができるように対策を立てる必要がある。さらに、科学の進歩と現代の教育的パラダイムでは、学問領域を超越した学びに力を注いでいる。情報とコミュニケーション科学は、一方では媒体に、もう一方では過程に焦点を当てるため、本来双補完的である。そのため、重要な共有領域の多くには、より優れた明解さと概念の一貫性が存在するに違いない。本稿は、情報を適切に扱うために必要な能力の研究開発について、学問領域の間に見られるいくつかの合致点を特定し、図書館学と情報科学の観点から考察を深めたものである。

**キーワード:** 情報スキル、情報コンピテンシー、メディア・リテラシー、コンピュータ・リテラシー、図書館学、情報社会、情報活用

### 1. はじめに

本稿では、さまざまな社会・経済的利益を提供する情報資源を効果的に活用するために、必要な能力について議論しながら、情報とコミュニケーション科学が問題とする主要な論点を明らかにする。情報やコミュニケーションの専門家は、多くの面で共通する資源や課題、すなわち情報および知識と向き合っている。この情報と知識は、伝達、普及、検索、活用の過程とも言える。これについて議論するのは、必要でありいいところあいでもある。マスメディアが、より民主的に情報や知識を伝達するという恰好の目標を達成するための重要な要素であることに疑いはなく、国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）や経済協力開発機構（OECD）のような政府機関によって促進される

多くの国際プロジェクトの目的であり、テーマとも言えるからである。これらのプログラムを遂行するため、有効性をモニターするための指標と基準を定義することが必要であるが、まずは本稿の焦点でもある共通言語について吟味しよう。例えば、3つの用語にはそれぞれの意味的ニュアンスがあるが、文意によって「コンピテンシー」、「スキル」および「能力」といった用語を交互に同じ意味のことばとして使う。または、まったく同じ意味ではないが、「informative（有益な）とinformational（情報の）」という形容詞が意味的に似ているかのように書くこともある。「情報スキルの発達」と「情報リテラシー」という用語も同じような事例である。後者はスペイン語では概念的に限定された意味合いもあるが、英語文献では

かなり一般的に使われている。

## 2. 情報の現代的重要性

この話題について、本稿の読者のだれもが社会における情報資源の重要性を確信しているため、あらゆる社会の情報の重要性について簡単に述べたい。ユネスコは以下のように宣言している(2002: 3)。「情報と知識は社会的変革の主要な圧力になっているだけではない。それらはまた、必要な情報と専門的技術が体系的かつ公正に使われ共有されさえすれば、人間社会に立ちほだかる問題の多くがかなり軽減されるはずであるという展望につながる。」同様に、ユネスコの後援のもと、ブラハ(2003)の専門会議で、「ブラハ宣言：情報リテラシー社会に向けて」(Spenser.2003: 1-2)が発表された。この宣言では、教養ある市民、健全な市民社会、そして競争力がある労働人口を創出するための必要なステップとして、情報リテラシーを促す学際的プログラムを開発するよう世界の政府機関に呼びかけている。この勧告は政府機関に向けられたものであるが、あらゆる社会の領域に課せられた責務であることは明白である。重要なのは、ユネスコが情報という必需品へのアクセスを承認し、2000年に創設された「あらゆるプログラムのための情報(IFAP)」の中で具体化されたことである。その目的は、情報アクセスを向上することによって、より公正な社会をつくり、世界各国が多様性のるつぼ化している状態からそれぞれの政府機関の努力を統括していくことにある。このプログラムの働きにより、2003年から2012年までの10年間をワールド・リテラシーにささげるという国連の提案が根本的に支持されている。<sup>1</sup>

## 3. 情報・知識社会

情報と知識は、現代社会を生き抜く重要な資源であると絶えず繰り返されるため、人類が経験している歴史的段階に、このネーミングがほとんど自動的につけられている。そのため、「情報社会」と「知識社会」の概念は、いつも区別されるとい

うわけではなく、似たような文言と理解される。両者の違いは、情報と知識が同義ではないことを理解して初めて見えてくる。本稿をお読みの方は、これらの用語の違いがはっきりとお分かりであろう。例えば、ベル(1985:154)は、情報については「ニュース、事実、統計、報告、立法、税法、司法判決、議決」などに関する言及であると提起する。その一方で「知識は、文脈、解釈、関連づけと概念化、議論の形態における説明にあたる。知識は結局のところ理論に行きつく。すなわち、事実、データおよびその他の情報に何らかの論理的方法をもって意味ある関係性もしくは脈絡を築き、そのような一般化の理由を説明することである。」科学者や研究開発に従事している者の数、または国内総生産活動の比率のような指標をあげることによって、情報社会が「知識社会」を凌駕したと主張して、経済的側面を大きく取りあげる識者(ベルを含む)もいる。

フィンランドの情報リサーチプログラムのコーディネーターであるパンザー(Pantzar、2000: 230-236)やその他の識者は、人類が増え続ける情報を有効利用すべきだと考えている。新技術によって情報を拡張し、問題解決を手助けするのに役に立つ知識を生成し、貧困、失業、孤独、犯罪、不安および戦争を削減することが容易になっているからである。人間のコミュニティ集団が多くの情報量にアクセスする時、知識に換わる原石を手に入れることになる。その時初めて我々は「知識社会」について話すことができるようになる。

情報もしくは知識社会に関するその他の重要な特徴として、いわゆるデジタル格差といわれるものがある。それは、ある社会グループの個人やメンバー、または国・地域が、情報という必需品にアクセスするのを妨げる障害全般をさす。元々は情報を得るための科学技術やスキルの問題として考えられていたが、時間の経緯とともに、情報の取り扱いに必要不可欠な能力の育成を含む他の要因についても話し合われている。例えばユネスコは、デジタル格差という用語をめったに使用する

ことはない。その用語が、主として情報アクセスや情報の使い方の欠如、すなわち技術的側面の問題の1つと考えられているためである。この要因に加えて、文化的、政治的、倫理的、教育的な障害もあるため、「デジタル格差」よりは「認知格差」という概念の方がより一層現状に即している(ユネスコ、2005:23)。情報の有効活用への障害の1つとして、情報を使いこなすための能力不足や低さが含まれるのは明らかである。

#### 4. 関連概念と用語

情報の流通、アクセス、および活用全般を改善するため、開発すべき能力として使用されるさまざまな用語の整理やこれを推進するための広範囲の取り組みが国際協力としてなされている。2005年4月、リヨン(フランス)では、リテラシーに関するヨーロッパ地方会議が開かれ、38ヶ国から異なる部門に属する約150人の関係者が集まった。会議の準備に先立ち出席者は、それぞれの国の読み書きに関する大がかりな調査に協力するよう求められた。調査(30ヶ国より回答)では、経済的、社会的、文化的に異なる角度からリテラシーに関するさまざまな定義を明らかにした(Encuentro、2005)。

今使われている用語を標準化することは、むしろ統計的モニターを行う上で考えられる指標の可能性としての前提条件であり、議論もし尽くしている。現在開発中の国際的指標には、ユネスコ統計機構(UNESCO Statistics Institute)によって調整されているものもある。手始めとして、主要な論点を説明するため3つの指標が考えられている。1. 供給、すなわち政府と他国の政府機関がさまざまなルートを通じて情報提供をする度合いを反映すること、2. 情報の活用、3. 人々が情報と通信技術を活用するために必要なスキル習得のレベル(ユネスコ、2007:3)。

図書館情報学では、情報を取り扱うための能力開発に関する活動、経験、または状況の中で使われている個別の用語の適用範囲やその正当性につ

いて、長い間論争が繰り返されてきた。次々に移り変わる論争は、言語や文化的な違い、絶え間なく出現する新技術や提案、見直しなどによってさらに交錯している。そのような中、議論に休戦を求める著者、オウス・アンサ(2005:366)などによって次の点にたどりついた。つまり、特定の現象を全く改善もせず、または明らかにしないまま、どの用語がより正確かを互いに証明するために大量のインクが消費されてきたのが現状である。しかし、ある用語が他の用語に取って代わるのは、単に概念に割り当てられた名前やディスクリプタ(記述語)を変えるにすぎないというのが実際のところである。ここで議論されている用語は以下の通りである。「利用者教育、利用者研修、書誌教育、情報スキルの発達、情報リテラシー」、そしてごく最近では「情報コンピテンシーの発達」である。スペイン語への翻訳を通じて国際的によく知られるようになった書籍の中で、ウィルソン(2000:103)は、アメリカ合衆国の図書館でも使用され、意味的混乱が明らかに少ないと思われる研修プログラム用の主な用語についての簡略な説明を掲載している。ウィルソンは以下の用語について言及している。1. 図書館オリエンテーション、2. 図書館教育、3. 書誌教育、4. 情報管理教育。

しかし、これらの概念では、意味の違いだけではなく、利用者教育のための活動や作業がますます複雑になっている現場の進捗状況も反映されるべきだとウィルソンは考えている。この複雑さは、主にICTによって生じているわけだが、そのおかげでより多くの情報量をたくわえ、より速く効果的に情報検索ができるようにもなった。しかし、これらの技術の使い方を学び、選りすぐりの情報を選別する方法を見つけ出すこともまた必要になっている。

スペイン語圏の諸国では、「利用者教育(educación)」と「利用者研修(formación)」のどちらの用語がいいのかで、ほとんどの議論が堂々巡りをしているようである。書籍『レファレンスと情報サービス:入門』<sup>2</sup>の翻訳者であるコン

プトン・ガレシア・フェンテスの注釈によれば、後者は、意味のある学習を強調する認知主義に基づいたフランスの教育心理学の学派から来た用語である。同じような注釈が、ベルナルド・オノリーによる著書、『教育理論に向かって：形成的力学』の読者に向けても言及されている。コンプトン・ガレシアによるこの主張は、「構成」という用語がフランスの教育制度でも広く使われているための射ているようだ。実際、情報利用者教育について言及するためにフランスで最も使われている用語は、情報利用者形成（「Formation à la Maîtrise de l'Information」）である。ところが、英語で書かれた教育関連の文献では、「formativity」の用語はほとんど使われていない（ERIC データベースの検索による<sup>3)</sup>）。しかし、早く（30年前）から、ユネスコの総合案内プログラム（Tocatlian、1978:382）で、「利用者教育」と「利用者研修」は同義語として考えられている。ユネスコは、それらの用語を「利用者の(a)情報ニーズの認識；(b)情報ニーズの定式化；(c)情報サービスの効果的活用；(d)情報サービスの評価、をサポートするため、現況および潜在的利用者を個別、またはまとめてオリエンテーションや研修を行うための総合プロジェクトまたはプログラム」と定義した。

「情報スキル」という用語は、今日までイギリスの文献では一貫して使われており、過去10年の間にファレス市自治大学（メキシコ）の専門家によって広く普及されてきた。「情報スキルの発達（Desarrollo de Habilidades Informativas）」（DHI）の翻訳によれば、過程に強調点がおかれるのは「発達」であり、制作を強調するのは「情報スキル」と定義される。形容詞の「有益な」は、「情報伝達能力」を示唆するには難点があるため、直接情報に言及する「情報の」の方がより適切である。しかし、「有益な」という用語が、メキシコやラテンアメリカのどこかの国で最初に使われ、普及したため、この用語が使われているというのが実情である。このような議論は、意味的な制限があるにもかかわらず、「情報リテラシー」の用語

が使われている英語圏の事例と似ている。コンピュータ・センターによる利用者教育会議が実用面を強調することによって、「情報スキルの発達」という用語がかなり役に立つことがわかってきた。しかし、我々が「情報スキルの発達」と言う時、実際にはさまざまな能力の構成要素の一部分だけを言及する機会が多いが、知識や態度の要素も加味していかなければならない。情報スキルの発達、または単に DHI の頭文字の語句がスペイン語圏のライブラリアンの中にも深く根づいてきた。さらに、2006年初期からスペイン人ライブラリアンは、どの用語が最適かの議論を避ける方法として、情報のリテラシー（informational literacy）を言及するのに頭文字 ALFIN を使うことを提案している。この提案はうまくいっている。この頭文字は発音しやすく、利用者のスキルや能力の欠如、すなわち利用者が情報の「イロハ」から始めなければならないという否定的意味合いの用語「リテラシー」（alfabetización）をも隠してしまう。スペイン語だけの意味に制限されるが、この頭文字はよく使われている。

#### 4.1. 情報活用のためのコンピテンシー

よく使われる用語に「情報コンピテンシー」もしくは「情報コンピテンシーの発達」がある。これは、児童生徒が卒業年度までに身につけなければならないコンピテンシーの基準となる新しい教育モデルの影響によるものである。情報管理について、コンピテンシーの用語が使われる事例が頻繁に見られる。簡単なインターネット検索でもコンピテンシーの用語が何百万件もヒットする。最も良い具体例として、大学研究図書館協会（ACRL）が作成した書籍があり、その文書では大学生が情報の効果的な利用者になるための基準が書かれている。図書館学の世界で最も参照され、活用されている文書例として、以下のものがある。『高等教育における情報リテラシー・コンピテンシーの基準：基準、実践指標、成果』（ACRL、2000）では、「リテラシー」の用語が無造作に表示されている。

これらの用語の大きな違いの1つは、外部からの仲介（ライブラリアンの働きかけなど）が個人に何かしらの影響を与える活動を含むことであり、その他の用語では自主的に個人や個々の仕事を進めていくという意味合いがある。よって、書誌教育、図書館教育または情報リテラシー（以下で議論するつもりである）の議論は、通常ライブラリアンが受け身の利用者の参加に伴い、図書館の情報資源やサービス、その活用方法について利用者教育を企画し実践することである。ここには利用者教育の概念が含まれている。

新しい教育的パラダイムでは、学習過程が主に個人作業や自主性にたよりがちなとき、これらの見解は勢いを失う傾向がある。これは、「個人による概念構造と知識に関する個人の行為」(Hernández Salazar, 1998)で定義された学習の認知理論にもますます合致してくる。さらに、文献では、批判的<sup>クリティカル</sup>思考によって養われた思考力が、情報を使いこなすためのコンピテンシーの補足要素であると何度も繰り返し述べられている。同時に、人々がより自主的な学習をするに従い、批判的思考は、情報資源をより効果的に活用することでさらに研ぎ澄まされていく。したがって、実際に、この過程をどのように手助けするかについての理論は非常に限られてはいるが、児童生徒の批判的思考を伸ばす手助けを教育制度の中で行っていく必要がある。利用者教育プログラムに関わっている情報学の専門家は、情報とマスメディア利用者の育成を進めていく方法について、さらに学んでいかなければならない。

#### 4.2. 情報リテラシー

「情報リテラシー」の概念は、1974年全国図書館情報科学委員会で、アメリカで増え続けているサービス部門に従事する者に必要とされる主要なスキルについて言及していたポール・ズルコフスキーによってつくられた。ズルコフスキーによれば、「職場で情報源の使い方の訓練を受けた人たちは情報リテラシーを身につけている。情報リテラシーを身

につけた人たちは、問題解決の方法をひな型にして、さまざまな情報ツールを活用するためのテクニックとスキルを学んでいる (Kapitske, 2003:39)」。この概念の主な特徴は、「成果としての情報リテラシー」に行きつくと、パトリシアS.ブレイビッキ (2006: 7-8) は述べている。「情報リテラシーは児童生徒の学習成果である。すなわち、刺激を与えて詰め込むことではなく、むしろそうした刺激を受けた後に児童生徒は何ができるのか、ということが求められてくる。」ブレイビッキの言外の意味は、「利用者教育」もしくは「研修」のことばとして同じ教育的方向性を持ち、それゆえ、構成主義の学習傾向を反映していない。よって、用語に文字通りの含みを持つものではない。

「情報リテラシー」の概念は、スペイン語で幾通りかに表現することができるが、この話題に関する文献の大部分が英語圏で発行されており、最も広く使われている。これに伴い、「情報リテラシー」の用語は、世界中とまではいなくても、少なくとも西洋では広まりを見せている。他の言語では、ラテンアメリカでなされているように、翻訳するというよりはむしろ、スペインでのスペイン語のように、英語の単語が直接使われている言語もある。ここでの制限は、「リテラシー」とはコンピテンシーが欠如した情報利用者に対して使われ、情報の「イロハ」から教えなければならないことである。「リテラシー」ということばは、通常読み書きや読み書きを教えるのに必要とされる最小限の能力であるため、スペイン語圏の国では混乱が生じている。同様の状況はフランスでも見られ、そこでは「情報リテラシー研修」という用語が使われている (Chevillote, 2003: 24-25)。さらに、アメリカでも「情報リテラシー」は、学習者を「教養がない」とみなすような否定的な意味合いがあるという主張がある。そのため、「情報リテラシー」を「情報フルーエンシー」の概念に置き換えるという最近の提案を読むことは興味深い。「情報フルーエンシー」の概念には、自己の情報管理能力を高めていこうとする考え方を広める利

点がある(Mani, 2004:30)。2006年、国際図書館協会連盟(IFLA)の情報リテラシー部門で、他の主要言語でも言語学的に許容されるより適切な用語に置き換えることができないかの議論がなされた。しかし、当部門では、「情報リテラシー」の文言が国際的見地から、図書館基金機関でも使われるべきと結論づけ、各国が自国の言語で最も適切な用語を採用するように勧告した。

## 5. その他のリテラシーの形態との関係

「情報リテラシー」という用語にはその意味制限による論争がいくつもあるが、実際に文献で引用されているということから、以下のセクションではこの用語を使うことにする。そこで、コミュニケーションと情報科学の領域にまたがる「情報リテラシー」の概念の関係について再検討することは、我々の主要な論題でもある。ボウデン(2002: 361-408)のように、情報リテラシーに隣接、もしくは関連した異なるスキルの関係性を解明しようと尽力してきた識者もいる。しかし、この種のスキルは、単なる読み書き能力だけではなく、特定の文脈において適切に機能するために必要な訓練を積むことだと理解されているため、リテラシーの1つの形態として言及されることが多い。そのため、ボウデンは情報リテラシーと、他のリテラシーの形態の関係性について次のように分析した。

1. 図書館リテラシー、2. メディア・リテラシー、3. コンピュータ・リテラシー。ボウデンの「国際的に周知されている複数の索引リストの分析に

よれば、「メディア・リテラシー」の用語は1990年代の終わりを通して使われるようになったが、「情報リテラシー」という用語が広まってきたのは1990年代前半以降である」。異なるコンピテンシーもしくはリテラシーにおける関係性を見つけるためのその他の方法は、教育情報源インフォメーション・センター(エリック)のシソーラス、もしくは教育分野の最良のデータベースの1つをチェックすることである。エリックシソーラスでは、「リテラシー」という用語を探すと、さまざまな関連用語が見られる(表1を見よ)<sup>4</sup>。

### 5.1. コンピュータ・リテラシー

情報スキルまたはコンピテンシーとコンピュータ・リテラシー育成の関係について、前者の用語は情報や通信技術を含み、広範囲に使われることも多いため、特別な言及がなされる。適切な情報管理は、コンピュータやその他のICTを習得することによって保証されると考える人たち(学生を含む)がいるのもまた一般的である。しかし、これだけでは不備があろう。情報コンピテンシーの概念は、スキルや知識だけではなく、態度にも及び、それは単に技術の使い方を知るだけでは身につけることはできない。事実、コンピュータ・リテラシーには必ずしも必要とされるわけではないが、情報を効果的に管理するためにとても重要なスキルがあるのは確かである。それは、検証すべき情報を分析、評価、推論し、一般化するために必要な思考力である。

限定注記	読み書き能力、書き言葉や文書によるコミュニケーション(例、読むことと書くこと)
上位標目	該当なし
下位標目	成人リテラシー、サバイバル・リテラシー、家族リテラシー、機能的リテラシー、情報リテラシー、メディア・リテラシー、読むこと、科学リテラシー、職場でのリテラシー、書くこと(作文)
関連標目	基礎力、文化リテラシー、非識字、識字教育、メタ言語学、数的思考力、リーディング・スキル、読むことと書くことの関係、ライティング・スキル
直接参照あり	リテラシー・スキル
データ入力日	07/01/1966

表 1

これについて、ACRL 基準の起草者である大学研究図書館協会は、以下の点を明確にする立場を取った。「情報リテラシーは IT スキルと関連しているが、個人、教育制度および社会と関連した幅広い意味を持つ。…情報リテラシーは、IT スキルとかなり重なる部分もあるが、それとは別の幅広いコンピテンシーの領域のことである。IT スキルは情報リテラシーの概念に深く織り込まれ、サポートしている」(ACRL、2000:3)。

## 5.2. その他のリテラシー

ユネスコにより頒布されたフランスマン (2005: 9-10) の文書では、情報と知識へのアクセスに関する用語として、コンピテンシーからリテラシーを含む以下のものが記載されている。それらは、情報リテラシー、(新)メディア・リテラシー、デジタル/コンピュータ/ICT リテラシー、ビジュアル・リテラシー、環境リテラシー、政治的/住民の/市民のリテラシー、カルチュラル・リテラシーである。

より複雑な図表 (表 2 を見よ) で、カットとラ

ウ(2008:18)は、情報スキルもしくは情報リテラシーの育成が、成人のための多様な能力モデルの核心的要素になる、という考えを共有した。個人が適切な社会生活を送るために必要なスキルの一覧表にはさまざまなものがある。その土台となるのは、筋道を立てて批判的に考えることができる個人の能力である。次のレベルでは、話したり聴いたりする言葉によるコミュニケーション能力が続き、これによって私たちをとりまく世界と相互に対話ができるようになる。そして、特に読み書き計算、すなわち基本的な読み書き能力に行きつく。社会の異なる分野で文書によるコミュニケーション・スキルが市民には必要とされるため、このスキル一覧表の区分は現代人の生活に欠かせないものである。あらゆるコンピテンシーの前提として、順番としては、まず IT とマスメディアを扱うためのスキル強化が必要になってくる。前者のスキルを学ぶことによって、デジタル技術やコミュニケーション機器の取り扱いができるようになる。これらのコンピテンシーを身につけた時、私たちは、マスメディアを含む複数ルートを紹介して届く

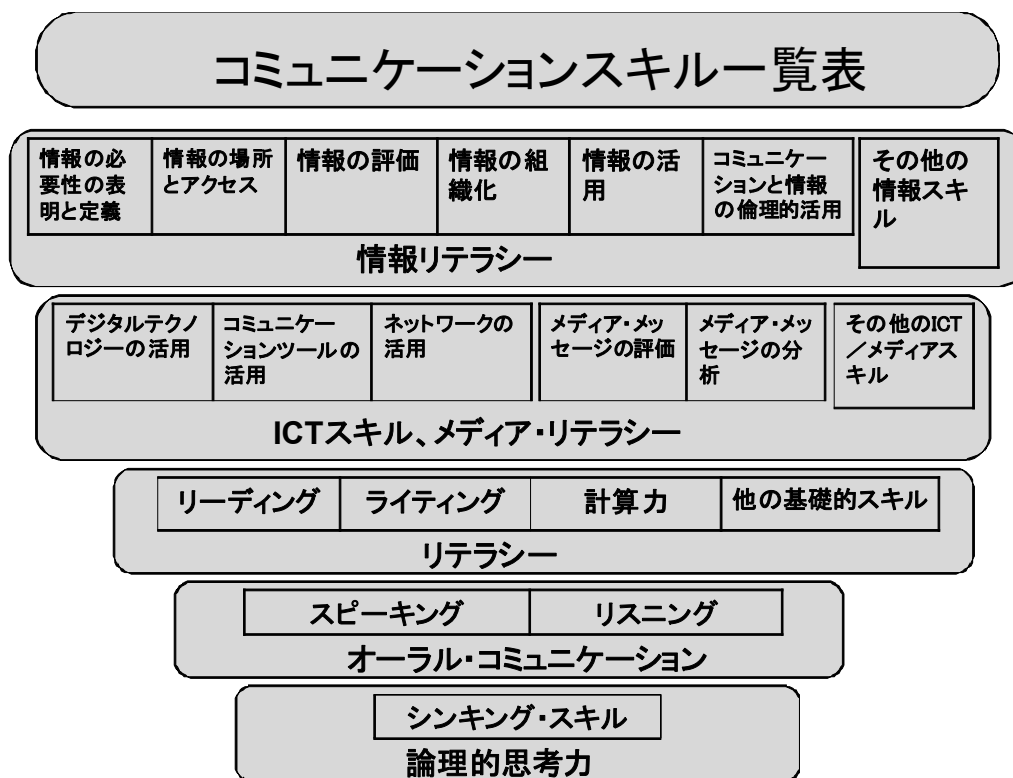


図 2

出典：ラルフ カッツ、ヘイソス ラウ (2008)『情報リテラシーの指針に向けて』パリ：ユネスコ、46; 18

情報、とりわけ工業化された社会での情報生活に欠かすことができない情報にアクセスし、フィルターをかけ、判断・活用するため、より高度なメディア能力を伸ばすことが確実にできるようになる。さらに、マスメディアを活用するためのメディアスキルや能力といった情報コンピテンシーは、自身の情報ニーズを特定するために必要不可欠であり、自身の情報の重要度によって、情報を配置し、検索し、評価する能力を高めていく必要がある。また、先人の知識とともに新たな情報を集めて足場を固める中で新しい概念を創出し、取捨選択をしていく。そして、文書（覚え書、記事、本または視聴覚メディア）もしくはその他の文字や音声による自己表現を通して意志の疎通を図ることが情報コンピテンシーの理想ともいえる。

## 6. マスメディア、ライブラリアンから見た情報管理

次の項目は、主に著者の個人的評価に基づくため、主観的な見方が多く散見されるだろう。とはいえ、さらに深く追求すべきいくつかの境界があるかもしれない。初めに、メディアで伝統的に提示される情報の類は、ライブラリアンや情報の専門家がよく注目するものとして比較される。

### 6.1. ライブラリアンにとって興味深い情報

初めに、ICTの発達によって、出版に使われている形式と情報の信憑性が疑われるものが同じように取り入れられていることが分かる。よって、情報の出典や目的によってはより多くの注意を払うことが必要になってくる。情報の専門家は、学術的な情報や科学的な方法によって導き出された特徴を持つものがより重要度の高い情報と判断する。したがって、マスメディア（例えば、新聞、ブログ、テレビ、ラジオ番組など）を介した情報の多くが注目するに値しないと考えられている。「良い」と考えられる情報源は、学術誌の論文や書籍、その他学術的かつ科学的成果のように、本質的には学術的文書を指す。そのような学術的文

書を特定し、所在を捜しだし、検索するには熟練したスキルが必要である。対照的に、マスメディアの情報は、探索して所在を突き止めなければならない学術情報と全く異なり、一般にほぼ至る所に利用者の手に届くところにある。

ライブラリアンや情報専門家の中には、常に情報というものに関わっているマスメディアは、学術情報とは異なる手法で情報をまとめ、異なる目的を追求していると思う者もいる。そのようなメディア（主にラジオ、テレビ、インターネットメディアなどの電子・視聴覚メディアであり、一時的影響力がある）によって発表された大衆向けの情報は、目新しい情報を提供することにより消費者の注意を引こうと躍起である。したがって、その手の情報は、学術系のように体系化された方法論に則って集められたものではないだろう。マスメディアで飛び交っている情報は、最も必要とされ、役に立つというわけではなく、最も利用者の関心を捕らえそうなしるものだ。もちろん、マスメディアでも、新聞における特集記事やテレビのドキュメンタリーなどでは科学的手法が取り入れられている。使用される媒体の如何にかかわらず、学術メディアで発表される情報との主な違いは、情報の信憑性をうらづける事実があるのか、またはただの思いつきで言及しているのか、それらを著者が定期的に明らかにするかによる。この点において、マスメディアを介して発表された情報の信憑性はそれほど明確ではない。アルガジン(2001: 86-100)によると、この区別をより分かりやすく説明し理解を深めるために、情報は以下の形で規則的に提示される。1. 事実 - 実証することができる情報、2. 推論 - 事実 + 意見（別のものからあるものを引き出すのを含む）、3. 意見 - 価値判断。

アルガジンによってリストアップされたこれらの要素は、どの種類の情報にも当てはまる。しかし、学術上のやり取りでは、どの形式であれ、より明確であることが常に要求される。情報専門家の立場からすれば、テレビ、新聞、ラジオ、その



他インターネット放送などのメディアの間で発表される情報は、いつも明確な情報ばかりではない。これは、必ずしも著者の意見を多く含む情報は価値がないというわけではない。著者の意見に主観が入るのは確かであるが、(ある推論を下して) 事実によって裏打ちされるなら、根拠のない意見とはいえないからである。要するに、マスメディアによって発せられる日々のニュースは、読者にとって、正確さの点でより大きなリスクを抱えている。そして、読者の多くは、通常信頼できる情報とそうではない情報を区別するスキルを持ち合わせていないのである。

さらに、メディアは知らないうちにオーディエンスにある特定の考えを植え付けており、そのような情報は広く流布されている。例えば、選挙戦の間、選挙を戦っている候補について制作者自身の興味関心のために歪曲されたメッセージやニュースがあげられているかもしれない。事実、一方もしくはもう片方の味方になるメディアもある(Aceves, 2001)。

### 7. コンピテンシーの一般化と差別化

マスメディアの活用において、情報リテラシーまたは情報コンピテンシーの育成とスキル研修との関係は、それぞれの目標にしっかりと結びつけられている。最も大きな違いは、育成すべき多様なコンピテンシーの強調点の中にある。情報リテラシーでは、情報を探索し、検索することが強調

されるが、メディア・リテラシーでは、情報を評価することの方に力点がおかれる。両者に共通したコンピテンシーは、情報を批判的に活用することである。同様に、情報コンピテンシーの発達では、その多くが学術的、科学的な類の資料活用に力点がおかれる。小学校から成人期、大学院の研究まで、通常個人が複雑な市民の意志決定および教育的な仕事にかかわっていくため、この種の能力は優先度が高い。その一方で、メディア・コンピテンシーは、厳密に社会的、経済的、政治的であるなしかかわらず、一般にあらゆる市民の社会的機能に関わるものである。言い換えれば、2つのコンピテンシーを身につけることは、読むことだけではなく、市場のさまざまなマスコミ媒体を見聞きする市民全体の理想でもある。そのため、想定されるターゲット・オーディエンスについては、2つのコンピテンシーの目的を切り離すことは難しい。なぜなら、情報コンピテンシーの育成は、主に教育機関によって成されるが、少なくとも理論的にはさまざまな個人、すなわち子ども、大人、学者および一般市民を対象にしているからである。その一方で、メディア・コンピテンシーの育成もまた社会全般を対象にしているが、情報コンピテンシーと比べると、一般にはより市民の側に焦点が当てられている。表3は、コンピテンシーの2つのグループとターゲット・オーディエンスの密接な相互関係について説明したものであり、対象となるものは同じである。それらは、メ



表 3

ディア、相違点、あらゆる情報に対応できる市民として必要な能力の3点である。図表にある要素は、すべてが大なり小なり隣接し、重なっているため、厳密に分けることはできない。

## 8. 結論

個人に必要とされる情報コンピテンシーは、異なる場面では同一人物かもしれない世の中の男女や科学者であるなしにかかわらず、それぞれが従事している活動の複雑さによって大きな差が出てくる。もしその日その日に使う情報ニーズだけなら、必要とされる能力は、本当に基本的かつ単純なものになるだろう。しかし、より複雑な決定が要求されるようになると、学術的、または研究環境のように、より熟練したスキルが必要になってくる。言い換えれば、私たちは、個人の経験や教育に基づく情報スキルをさらに磨いていかなければならない。情報ニーズが複雑化してくると、学術誌や書籍／電子書籍など、情報のゲートキーパーとしての体裁の利便性やアクセスがさらに必要とされてくる。電子書籍は、新聞やテレビ番組などの通常コンテンツより、生産には複雑な仕組みを伴う。しかし、これは新聞記事やテレビ番組が深い裏付けや推論に基づくものであることを否定することではない。これらのメッセージを理解し、論理的に考えるために、市民には高いレベルの知識や能力が要求されている。しかし、情報スキルについて一般的にいえば（従って、明らかに個々の特徴を排除することになるのだが）、情報スキルはより複雑な文書を手がけることに向いており、一方、マスメディアを扱うためのメディアスキルは（一般化するには概括的ではあるが）、個人の日常生活でよく使われる実用的なものであり、より単純な情報を扱うためのものである。

双方のコンピテンシー、すなわち情報・コンピテンシーとメディア・コンピテンシーはどちらも必要不可欠なものである。メディアスキルを身につけるということは、毎日過熱気味なメディアを批判する社会の成熟度を明らかに意味づけるもの

であり、これは社会の日常の命運を占うものである。一方、情報スキルは、生産や人文科学の領域における個別の応用から、科学技術を生み出すための科学的かつ学術的な国力に結びつけられる。

最終的な結論として、情報・コンピテンシーとメディア・コンピテンシーが及ぶ範囲は、入ってきた情報を批判的に処理するための共通能力として集約される。両者の違いは、調査・検索スキルや使う情報の文書スタイルによって、どこを強調するかにある。どちらの領域でも個人が身につけるべき能力（図書館学／情報科学およびコミュニケーション科学）は、一般市民も含め、就学したばかりの子どもから大学院の研究者まで、皆同じである。どちらも、情報を活用するために批判的に判断ができるようになることがその目的である。その違いは、膨大な視聴覚や書きことばの多様性の中において、図書館学は学術的かつ科学的な情報の活用に力点をおくが、コミュニケーション科学ではマスメディアの活用を好む傾向があるということである。

## 注

1 ユネスコでこのプログラムに関する詳しい情報を見つけることができる。

([http://portal.unesco.org/ci/en/ev.php-URL\\_ID=21290&URL\\_DO=DO\\_TOPIC&URL\\_SECTION=201.html](http://portal.unesco.org/ci/en/ev.php-URL_ID=21290&URL_DO=DO_TOPIC&URL_SECTION=201.html)) (2008-05-28).

2 Richard E. Bopp & Linda C. Smith (Eds.) (2000). *Reference and Information Services: An Introduction*.

The note appears on p. 101 of this book.

3 エリックのウェブサイトで「リテラシー」という用語を使って、2008年9月30日に検索された検索結果([www.eric.ed.gov](http://www.eric.ed.gov))。

4 エリックのウェブサイトで「リテラシー」という用語を使って、2008年9月30日に検索された検索結果([www.eric.ed.gov](http://www.eric.ed.gov))。

参考文献

- Aceves González, F.J. (2001). El papel de los medios en la construcción de los temas (Issues) electorales: el caso de las elecciones presidenciales de 1994 en México, in Cerdán, J.L. & Aceves, J. (Eds.). Anuario de investigación de la Comunicación. México: CONEICC.
- Argudin, Y. & Luna, M. (2001). Libro del profesor. Desarrollo del pensamiento crítico. México: Universidad Iberoamericana/Plaza y Valdés.
- Association of College and Research Libraries (2000). Information Literacy Competency Standards for Higher Education: Standards, Performance Indicators, and Outcomes. Chicago: ACRL, ALA, 8 ([www.ala.org/acrl/ilstandar](http://www.ala.org/acrl/ilstandar)) (2007-09-10).
- Bawden, D. (2002). Revisión de los conceptos de alfabetización informacional y alfabetización digital. *Anales de Documentación*, 5; 361-408 ([www.um.es/fccd/anales/ad05/ad0521.pdf](http://www.um.es/fccd/anales/ad05/ad0521.pdf)) (2008-01-08).
- Bell, D. (1985). Gutenberg and the Computer: On Information, Knowledge and Other Distinctions, in Duff, A. (Ed.) (2000). *Information Society Studies*. London: Routledge (Routledge Research in Information Technology and Society).
- Breivik, P. (2000). Information Literacy for the Skeptical Library Director. IATUL Conference Proceedings, Queensland University of Technology, Brisbane, Queensland, Australia, 3rd/7th July: Virtual Libraries: Virtual Communities ([http://iatul.org/conference/proceedings/vol10/papers/breivik\\_full.html](http://iatul.org/conference/proceedings/vol10/papers/breivik_full.html)) (2006-11-16).
- Catts, R. & Lau, J. (2008). *Towards Information Literacy Indicators*. Paris: UNESCO; 46.
- Chevillote, S. (Coord.) (2003). *La formation à la maîtrise de l'information à l'heure européenne: problèmes et perspectives*. Lyon: École Nationale Supérieure des Sciences de l'Information et des Bibliothèques.
- Chevillote, S. (Coord.) (2005). *Encuentro de la Región Europea sobre Alfabetización*. Lyon, 02/05-04-05 ([www.unesco.org/education/uie/news/lyonreport\\_sp.shtml](http://www.unesco.org/education/uie/news/lyonreport_sp.shtml)) (2007-11-16).
- Fransman, J. (2005). *Understanding Literacy: a Concept Paper*. Paris: UNESCO; 31.
- Hernandez Salazar, P. (1998). La formación de los usuarios de información en instituciones de educación superior, in Cuadernos, 4. Centro Universitario de Investigaciones Bibliotecológicas. México: UNAM; 70.
- Kapitske, C. (2003). Information Literacy: A Positivist Epistemology and Politics of Outformation. *Educational Theory*, 3, 1, Winter; 37-53.
- Mani, N. (2004). On My Mind: From Information Literacy to Information Fluency. *American Libraries*, February; 30.
- Owusu, Ansah, E.K. (2005). Debating Definitions of Information Literacy: Enough is Enough! *Library Review*, 55, 6; 366-374.
- Pantzar, E. (2000). Knowledge and Wisdom in the Information Age. *Foresight / The Journal of Future Studies, Strategic Thinking and Policy*, 2, 2, Apr.
- Spenser, T. (2003). Information Literacy Meeting of Experts. Prague, the Czech Republic, September 20-23. Conference Report; 31.
- Tocatlian, J. (1978). Formación de usuarios de la información: programas, problemas y perspectivas. *Boletín de la UNESCO para las bibliotecas*. Citado por Hernández Salazar, P.: La

formación de los usuarios de información en instituciones de educación superior, 1998; 70 (Cuadernos; 4. Centro Universitario de Investigaciones Bibliotecológicas).

UNESCO (2005). Hacia las sociedades del conocimiento. Paris: UNESCO (<http://unesdoc.unesco.org/images/0014/001419/141908s.pdf>) (2007-02-05).

UNESCO (2002). La UNESCO y la Cumbre Mundial sobre la Sociedad de la Información. Paris: UNESCO; 12.

UNESCO (2007). A Statistical Framework for Information Literacy. Paris: UNESCO, Institute

for Statistics. Intergovernmental Council for the Information for All Programme.

Wilson, L.A. (2000). La instrucción como servicio de consulta, in Bopp, R.E. & Smith, L.C. (Eds.). Introducción general al servicio de consulta: libro de texto para el estudiante de bibliotecología y manual para el bibliotecario de consulta. México: UNAM/Alfagrama: IC, 420; 101-126.

(訳 : 村上郷子)